

『南方録』『覚書』冒頭部の仏教思想

——薪水の修行譚を中心に——

櫻 本 香 織

はじめに

『南方録』は江戸時代中期に立花実山（一六五五～一七〇八）によつて撰述された茶の湯の理論書である。⁽¹⁾『南方録』の大きな特徴の一つに、種々の仏教の思想によつて茶の湯を理論づけている点が見られる。とくに「覚書」冒頭部には、茶の湯と禪の修行は同じであるという「茶禪一味」の思想が見られるという。

たとえば、「小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修行得道する事也」という冒頭部の一文について、熊倉功夫は、「禪という文字はみえないけれど、茶禪一味にはかならない」と指摘した。⁽²⁾また、熊倉は「この一節で一番大切なことは、茶の湯の本質が「行ずる」ことである（中略）茶の湯は生活を「行ずる」ことだ。だから最も近いのは仏道の修行である」と主張した。⁽³⁾それより以前、田中仙樵はこの冒頭部の出典が鳩摩羅什訳『遺教経』にあるとも述べている。⁽⁴⁾

この「覚書」冒頭部は、『南方録』に関する研究では必ずと言っていいほど取り上げられ、そこに『南方録』全七巻の主張が簡潔に述べられる重要な箇所であると説明されてきた。

しかし、従来の『南方録』研究では、『南方録』における種々の思想の根拠を明示することなく、その内容を論じている場合がしばしば見受けられる。そのため、『南方録』の思想的背景にどのような典拠があるのかは、具体的に明らかにされているとはいえない。

このような現在の研究状況を踏まえた上で、筆者はこれまで、『南方録』の中心的概念である「草庵」に着目し、その典拠が道元の『正法眼蔵』における「草庵」の解釈にあることを明らかにした。⁽⁵⁾また、『南方録』の思想的な枠組みの一つである「書院台子」と「草庵」の対比構造も、道元の「豊屋」と「草庵」の解釈に由来していることを指摘した。

小稿では、こうした『南方録』の思想研究の一環として、『南方録』『覚書』冒頭部と、これに対応する内容をもつ実山自身の『草庵自

誠並示僕童」「其の七」の訳註研究を行う。両者の比較検討を通して、実山がどのような思想を背景として「覚書」冒頭部を著したのかを明らかにしたい。これを説明することによって、実山がどのように茶の湯を捉え、意義づけたのかが明らかになるう。

一 「覚書」冒頭部訳註

以下に、『南方録』「覚書」冒頭部を、本文・現代語訳・註釈の順に掲げる。なお、現代語訳に関しては熊倉功夫⁶の解釈を適宜参照し、傍線・記号等は私に附した（以下同じ）。

【本文】

A 宗易、ある時、集雲庵にて茶湯物語ありしに、B 茶湯は台子を根本とすることなれども、心の至る所は草の小座敷にしくことなしと、常くの給ふハ、いか様の子細か候と申。宗易の云、C 小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修行得道する事也。D 家居の結構、食事の珍味を樂とするは俗世の事也。家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事也。E 是仏の教、茶の湯の本意也。F 水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ。花をたて香をたく。G ミなく仏祖の行ひのあとを学ぶ也。なを委しくハ、己僧の明めにあるべしと、の給ふ。

【現代語訳】

千利休が、ある時、集雲庵で茶の湯の談義をした時に、茶の湯というのは台子を根本とすることではあるが、茶の湯の心が究極の境地に達する所は草の小座敷に及ぶものではないと、常々おっしゃったことは、どのようないわれがありましようかと私宗啓が申し上げました。利休がいうには、小座敷の茶の湯は、第一の仏法をもって修行し道を得ることです。住居の構え、食事の珍味を樂しみとするのは俗世間の事です。家は雨が漏らないほど、食事は飢えないほどであれば十分なことです。これこそが仏の教えであり、茶の湯の本来の意義なのです。水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、仏に供え、人にも差し上げ、自分も飲む。花を立て香を焚く。これらすべては仏祖の行いのあとを学ぶことです。なおくわしいことは、わたくし南坊宗啓の見極めにあるはずだと、おっしゃられました。

【註釈】

○宗易 千利休（一五二一―一五九一）のこと。利休は幼名を「与四郎」と称し、大徳寺の笑嶺宗訢に参禅した際、法名を「宗易」、齋号を「拋筌斎」と授かった。なお、「利休」の名は居士号である。「南荘今市町千与四郎ト云シ人也。先祖ヨリ久住ノ人、後二千宗易ト改名シ、利休居士ト云リ」（『堺鑑』下「千宗易道号ハ利休」）。

○集雲庵 堺南宗寺の塔頭。「昔日岐翁ハ一休和尚ノ弟子也。一

休ノ御心ニ背、擯出セラレ当津市町六間筋ニ菴地ヲ求、集雲菴ト号シテ被_レ住居、(中略)又集雲菴ト云モノ似合トテ、南坊ト呼玉ヒシト也。(中略)其後南宗寺_ハ寺地ヲ移シ今ノ集雲菴開基是也」(『堺鑑』下「岐翁」)。

○茶湯物語 茶の湯についての談義。「十七歳ノ比ヨリ茶湯ニ心ヲ寄、道陳ヘ通、数奇ニ名ヲ得タリ。十九歳ノ時、道陳・紹鷗ヘ物語ノ序ニ、千与四郎ト云者茶湯ニ心ヲナシテ、我方ヘ切々来ケル」(『堺鑑』下「千宗易 道号ハ利休」)。

○台子 書院で唐物道具を飾り用いる棚のこと。「惣別、台子の茶湯に茶の立て様、極上の大事。この内に密伝、条々あり」(『山上宗二記』「台子四つ飾りの事」)。

○根本 物事の大本。「世間以_レ王為_レ根本、一切人民為_レ所依」(般若訳『大乘本生心地観経』卷二「大正三・三〇二下」)。「世間ニ堺舜慶トテ茶入ヲ持弄事ハ、此人根本当地ノ生ニテ、其後屋州瀬戸ニテ茶入ヲ焼、又伊勢ニテモ焼故ニ、其々ノ所ノ名ニヨリテ分アレドモ、根本此地ヨリ出タレバ一事也。其子孫利休時代迄堺ニ居住スト也」(『堺鑑』下「堺舜慶」)。

○心の至る所 心が究極の境地に達する所。「定家卿歌にも待るにや。ただし、作者は歌なくとも付け侍るべし。心の至る所によればなり」(心敬『老のすさみ』「旅寝かなしき冬の山里」)。

○草の小座敷 草庵茶室のこと。「出家学道のいかでか豊屋に幽棲するあらん。もし豊屋をえたるは、邪命にあらざるなし。清

浄なるまれなり。(中略)草菴白屋は、古聖の所住なり。古聖の所愛なり。晩学したひ参学すべし。たがゆることなかれ。黄帝・堯・舜等は、俗なりといへども、草屋に居す(中略)俗なほ草屋に居す。出家人いかでか高堂大観を所居に擬せん」(『正法眼蔵』「行持」)。

○子細 いわれ。「住吉の神主、津守国夏大鼓の役にて登山したりけるが、いかなる子細ありけるにや」(『大平記』卷二「石清水并びに南都北嶺行幸の事」)。

○と申 と申す。南坊宗啓の発話。南坊宗啓については、「己僧の明め」の項参照。

○しくことなし 及ぶものではない。「いかさまにも鷹の仇には煙にしく事なし」(『伊曾保物語』中「十九 狐と鷲の事」)。

○小座敷 茶室のこと。江戸前期以前の茶室の呼び方。『南方録』では四畳半以下の茶室のことをさす。「同八月十八日昼 小座敷、始而、大林長老 せうれい泉首座 開想 昌持者 暮テ掃門 道叱、被_レ来候」(『天王寺屋会記』「宗達自会記天文二十四年八月」)。「草の小座敷」の項参照。

○第一仏法を以て 第一の仏の法をもつて。「菩薩・摩訶薩、受_三持三世諸菩薩法。能以_三仏法、教化衆生、至心修_三行菩提之道。為_三菩提道不惜身命。不惜身命是菩薩戒」(求那跋摩訳『菩薩善戒経』「大正三〇・九六九上」)。「しかあれば身心を澡浴して、香油をぬり、塵穢をのぞくは、第一の仏法なり。新浄の衣

を著する、ひとつの浄法なり。塵穢を澡浴し、香油を身に塗するに、内外俱浄なるべし。内外俱浄なるとき、依報正報清浄なり」(『正法眼蔵』「洗面」)。

○修行得道 仏の教えを守って実践し悟りを得ること。「於此世界、尽見彼土六趣衆生、又見彼土現在諸仏、及聞諸所説經法、并見彼諸比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷諸修行得道者、復見諸菩薩・摩訶薩、種種因縁・種種信解・種種相貌修行菩薩道」(『法華經』卷一・序品「大正九・二中」)。「斯等、不聞不信是經、則為大失。我得仏道、以諸方便、為説此法、令住其中」(『法華經』卷五・安樂行品「大正九・三九上」)。「おほよそ有覺無覺の發心するとき、はじめて一仏性を種得するなり。四大五蘊をめぐらして、誠心に修行すれば得道す。草木牆壁をめぐらして、誠心に修行せん得道すべし」(『正法眼蔵』「發無上心」)。「心の至る所」の項参照。

○家居の結構 住居の構え。「末世の愚人、いたづらに堂閣の結構につかるることなかれ。仏祖いまだ堂閣をねがはず。自己の眼目いまだあきらめず、いたづらに殿堂精藍を結構する、またく諸仏に仏字を供養せんとにはあらず、おのれが名利の窟宅とせんがためなり」(『正法眼蔵』「行持」)。「草の小座敷」の項参照。

○食事の珍味を樂とするは俗世の事 食事の珍味を樂しみにするのは俗世間のこと。「世間珍味無_レ不_レ必備、有_レ破_レ薪者、有_レ取

レ水者、作_レ食者、掃_レ地者、香汁灑_レ地者、敷_レ座者、散_レ華者、敷_レ高座者」(仏陀什・竺道生訳『弥沙塞部和醯五分律』卷二十五「大正二二・一六六下」)。「又況百味珍饈、通相供養、道我四事具足、方可_レ發心。只恐做手脚不_レ迄、便是隔_レ生隔_レ世去也」(『正法眼蔵』「行持」)。「いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず」(『正法眼蔵』「發菩提心」)。

○家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事 家は雨が漏らないほど、食事は飢えないほどであれば十分なこと。「百丈笑云、第一坐、輪却山子也。遂遣師往_レ瀉山。是山峭絶、復無_レ人煙。師猿猱為_レ伍、橡栗充_レ食。山下居民、稍稍知之、帥衆共營_レ梵宇」(道原『景德伝灯録』卷九「大正五一・二六四下」)。「永平清規」「知事清規」に同文あり。「大瀉山大円禪師は、百丈の授記より、直に瀉山の峭絶にゆきて、鳥獸為伍して、結草修練す。風雪を辞勞することなし。橡栗充食せり。堂宇なし常住なし」(『正法眼蔵』「行持」)。

○是仏の教 これこそが仏の教えである。「諸仏の道現成、これ仏教なり。これ仏祖の仏祖のためにするゆえに、教の教のために正伝するなり(中略)このゆえに説是經なり。是經これ仏教なり。しるべし恒沙の仏教は竹篋扠子なり。仏教の恒沙は拄杖拳頭なり」(『正法眼蔵』「仏教」)。

○茶の湯の本意也 茶の湯の本来の意義である。「仏經は仏道の本意にあらず。祖伝これ本意なり。祖伝に奇特玄妙つたはれり」

〔『正法眼蔵』「仏経」〕。

○水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたてる。「王聞_二仙言_一、歡喜踊躍。即隨_二仙人_一、供_二給所須_一、採_二菓_一、汲_二水_一、拾_二薪_一、設_二食_一、乃至、以身而為_二床座_一、身心無_レ倦。于時奉事經_二於千歲_一、為_二於法_一故、精勤給侍令_レ無_レ所_レ乏（中略）即便隨_二仙人_一、供_二給_二於所須_一、採_二薪_一及菓_二麻_一、隨_二時恭敬_一与、情存_二妙法_一故、身心無_レ懈倦」（『法華經』卷四・提婆達多品「大正九・三四下」）。「神通并妙用、運_二水及般柴_一」（道原『景德伝灯録』卷九「大正五一・二六三中」）。「いま諸仏諸祖の現成するは、施為に転次せらるるなり。五仏六祖の西來する施為に転次せらるるなり。いはんや運_二水般柴_一は、転次しきたるなり。即心是仏の現生する転次なり」（『正法眼蔵』「授記」）。

○仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ 仏に供え、他の人々にも差し上げ、自分も飲む。「彼買_二此池_一、以_二華奉_二仏_一廟_一、水果自供_一。吾飲_二其水_一」（康僧会訳『六度集經』卷五「大正三・三〇上」）。「為_二供所依_一、由_二於昔時_一、以_二手持_二供_二仏_一施_二人_一。称周_二法界_一。故令_二真流供具等_一諸仏之難思」（澄観撰『大方広仏華嚴經疏』卷十六「大正三五・二二上」）。

○花を立て香をたく 花を立て香を焚いて供養すること。「その儀はかならず祖師を焼香礼拝し、応受菩薩戒を求請するなり。（中略）あるひは衣服を浣染して、華を散し香をたき、礼拝恭

敬して、その身に着す」（『正法眼蔵』「受戒」）。

○仏祖の行ひのあとを学ぶ 仏祖の行ひのあとを学ぶこと。仏祖はここでは釈尊のこと。「もし仏祖の行_レ履をふむときは、仏祖にちかづくみちあり。仏祖あまねく天衆神道を超証するには、天衆神道はるかに見上のたよりなく、仏祖のほとりにちかづきがたきなり」（『正法眼蔵』「行持」）。

○己僧の明め わが僧の見極め。己僧とは利休の弟子とされ、『南方録』の執筆者に設定される南坊宗啓をさす。なお、南坊宗啓は歴史上、實在が確認できない。「わかあとのあきらめらるることは、仏のあとをはかるよりうるなり。このあとをうるを仏法とはいふなるべし」（『正法眼蔵』「唯仏与仏」）。

二 「覚書」冒頭部の解釈

以上、『南方録』「覚書」冒頭部の訳註を試み、「覚書」冒頭部の主要な典拠と思われる表現を推測した。この類似の用例群から「覚書」冒頭部についてどのような解釈ができるのか、文頭から順に考察を加えたい。右の通り、「覚書」冒頭部の表現はほとんどが仏教経典および論書から構成されている。とりわけ『正法眼蔵』に重点を置き、また『正法眼蔵』が用いている『法華經』等の文献にも遡ることができるとがわかる。

Aに仏教語は見られないため、先行研究で『南方録』の出典の一

つとして指摘されている『堺鑑』⁽⁸⁾から用例を掲げた。神津朝夫は、『南方録』に見られる利休や紹鷗・道陳に関する記事、集雲庵開基の岐翁が南坊と呼ばれたこと、利休が草履の裏に革を張った雪駄を創案したという話は、『堺鑑』の内容と共通すると指摘している。⁽⁹⁾また、熊倉によれば、『南方録』に引用される藤原家隆の「花をのミ待らん人に山ざとの 雪間の草の春を見せばや」という歌は、『堺鑑』「千宗易」の項に根拠があるという。⁽¹⁰⁾

『堺鑑』は、貞享元年（一六八四）の衣笠一閑（生没年未詳）の著作とされ、大坂堺にまつわる歴史的名所や人物をまとめた地誌であり、上・中・下巻からなる。『堺鑑』下巻「人物門」の「僧道」「技芸」「名物」の項の各人物に関する記述に、Aの文中にある「宗易」「集雲庵」「茶湯物語」の語彙が見られる。このことから、実山はAを撰述するにあたって、『堺鑑』下巻を参照していたと確認できる。

Bでは、『南方録』の思想的枠組みである「書院台子の茶」と「草庵小座敷の茶」の対比構造のもと、「草庵小座敷の茶」が重視されている。この対比構造について、筆者は以前、『南方録』における「草庵」の典拠を検討した際に、その解釈が道元の『永平清規』や『永平広録』、そして『正法眼蔵』における「豊屋」と「草庵」の対比構造に由来すると指摘した。⁽¹¹⁾

「根本」の語註で掲げた『大乘本生心地観経』⁽¹²⁾では、「世間は王をもつて根本と為す」とある。また、『堺鑑』では世間で堺舞慶が所持した茶入が「根本」であり、その後瀬戸や伊勢で茶入が焼成され

たというように、舞慶の茶入が「根本」であると説明している。Bに茶の湯は台子を根本とするところなのは、茶の湯において「台子」は書院で唐物道具を飾る格式が伴うという点で、草庵茶の湯の「根本」とされるものと解釈できる。一方、心の極まる所は草の小座敷であると強調する。このBにおける対比は、『正法眼蔵』に見られる「豊屋」と「草庵」の対比関係と近似しており、「覚書」冒頭部の茶の湯のあり方が、『正法眼蔵』の解釈によって位置づけられていることがわかる。なお、「台子」と「草庵」の語は、『堺鑑』には確認できなかった。

続いてCについて、解釈を深めたい。C「小座敷の茶の湯は、第一仏法を以て修行得道する事也」は、利休の発話とされており、ここで「草庵」の茶の湯は「仏法」をもって修行得道することだと定義されている。前述の通り熊倉は、この部分が『南方録』の茶の湯に禅の影響がある箇所として指摘するが、その背景については先行研究の「茶禅一味」説を踏襲するだけで詳細に分析していない。

Cの語註において、「第一仏法を以て」と「修行得道」が『菩薩善戒経』『法華経』『正法眼蔵』に典拠があると推測した。なぜならば、まず「第一仏法を以て」の語句は、『菩薩善戒経』に「以仏法」や「修行菩提之道」の語があり、『菩薩善戒経』の内容とCが対応すると考えられるからである。また、道元は菩薩戒の儀式や作法を述べる『正法眼蔵』『受戒』において、『菩薩善戒経』を参照している可能性⁽¹³⁾がある。『菩薩善戒経』とは、大乘菩薩の修行法を解説し

た經典である。『菩薩善戒經』では「菩薩・摩訶薩、受持三世諸菩薩法、能以_二仏法_一教化衆生、至心修行菩提之道」とあるように、菩薩は三世すなわち過去・現在・未來の菩薩の法を受けたもち、よく仏法をもつて、衆生を教化し、誠の心をもつて菩提の道すなわち仏道を修行すると説く。

また、Cの「修行得道」には、『法華經』を出典として指摘した。というのは、「修行得道」という語は『法華經』とそれに関連する論疏にしか見られない言葉だからである。『法華經』序品では、「并見彼諸比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷諸修行得道者、復見諸菩薩・摩訶薩、種種因縁・種種信解・種種相貌行菩薩道」とあり、諸々の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷らが修行し悟りを得ていることが説かれる。また諸々の菩薩らが種々の因縁や信解、様々な相貌をもつて、菩薩道を修行し体得しているのが見えたとする⁽¹⁷⁾。

さらに、『正法眼蔵』の「おほよそ有覺無覺の発心するとき、はじめ一仏性を種得するなり。四大五蘊をめぐらして、誠心に修行すれば得道す。草木牆壁をめぐらして、誠心に修行せん得道すべし」を典拠として示した。なぜならば、この箇所では、仏となるためには、草木で覆われた垣根や壁という空間の中で、修行すれば道を得ることができるという説明されているからである。この内容は、Cの茶の湯は草や木で覆われた露地の中の草庵小座敷の中で修行し道を得るという主張と影響関係があると考えた。

しかし、「仏法」と「修行得道」のうちの「修行」「得道」という

語は、仏教において、数多く見られる言葉である。また、Cの「得道」における「道」が、『菩薩善戒經』および『法華經』の「道」であるか、あるいは何に由来するものか、現段階では特定できない。今後はこの「道」の解明を行い、さらにCの背景について明らかにしたい。

Dでは、Bの「書院台子の茶」と「草庵小座敷の茶」の対比関係、すなわち「世間」的なものと「出世間」的なものとの対立関係を、今一度繰り返し、草庵茶の湯のあり方を示す文言として強調している。文中の「家居の結構」を楽しむという表現は、『正法眼蔵』で説かれる「草庵」に対する「堂閣」すなわち「豊屋」に当てはまる。それは、出家人という仏道を学ぶものの住居であってはならないこと、また末世の愚人がそのような居を構えることに疲弊してはならない、仏祖はそれを願ってはいないこととする。この「書院」すなわち「世間」と、「草庵」すなわち「出世間」の対比は、『南方録』全七巻最後の巻である「滅後」の冒頭部に強調して述べられている。次に、Dに対応する箇所を「滅後」から抜粋しよう。

草菴ヲ書院ノゴトク取サバキ、其本意ヲ尋ルニ不_レ及。或ハ大食大酒ノ人ハ、草菴ニテモ酒盛ノ興ヲナシ、ソノ心々ニカナハザレバ、佗ズキイヤニ思フ也。世ヲワタル師匠ドモ、大名ノ氣ニ入、茶ノ會長ズルヲ專ト心得。銀モチブゲン者ノコノコト好ムヲ幸トシテ、欲心ヨリス、ムル茶ノ湯ナレバ、只今サヘ思ノ外ナルフルマヒ多シ。マシテヤ末代ノ茶思ヤラレテ不_レ及_二是

非。

《草庵小座敷を書院のように取りふるまい、その本来の意義を求めるには及ばないことである。或いは大食大酒の人は、草庵においても酒盛りの楽しみをし、そのおのおのの心に適わなければ、佗数寄を嫌に思うのである。世を渡る師匠たちは、大名の氣に入るように、茶会の時間を長くすることを専ら心得ている。金持ち分限者がこのことを好むのを幸いとして、欲の心よりすすめる茶の湯であるから、まさに今でさえ思いがけないようなふるまいが多い。ましてや末代の茶の湯のことを思いやるとうとうしようもない。》

この引用箇所は、Dを敷衍した内容であると考えられ、Dに附した語註『正法眼蔵』『行持』の内容とも類似する。ここでは「又況百味珍饈、通相供養、道我四事具足、方可_三発心。只恐做手脚不_レ迄、便是隔_レ生隔_レ世去也」とあるように、たくさんのごちそうを振舞い、かわるがわる供養し、供養に用いる四事の飲食・衣服・臥具・医薬も備わったので、まさに道を得ようと発心するべきというが、そのようなことでは発心はできないと説かれる。『南方録』『滅後』の冒頭部では、撰述者実山が現状の茶の湯を批判し、かつ茶の湯の将来に対する悲観的な見方を述べている。⁽¹⁸⁾ Dの「家居の結構」の典故とされる『正法眼蔵』『行持』の「末世の愚人、いたつらに堂閣の結構につかるることなかれ」という文言も、右に引用した「滅後」で述べる末代の茶を思い悲観する内容と近似している。このことから、

DとBすなわち『南方録』の「書院台子の茶」と「草庵小座敷の茶」の対比関係に、『正法眼蔵』の影響があることが確認できる。

Eでは、「是仏の教、茶の湯の本意也」と簡潔に述べる。「是仏の教」は西山松之助・熊倉功夫の先行研究では「これ仏のおしえ」と読み、前文のCとDを指している。一方、「ぜぶつのおしえ」と読み、「是心是仏」というこの心そのものが仏であるという解釈も可能であろう。だが、語註で示した『正法眼蔵』には、「是経これ仏教なり」とあり、「これ仏教」が「是経」を指している。ここでは、「是仏の教」は「これ仏のおしえ」と読み、CとDの内容を指していると考えたい。

次に、Fの一文について検討したい。このFは、小稿で最も注目する箇所である。というのも、ここは『法華経』が典故と考えられ、かつ『正法眼蔵』も典故とされる重要な文だからである。Fの「水を運び、薪をとり」の文言については、『法華経』提婆達多品に典故がある。Fと対応する提婆達多品の一文を取り上げてみよう。

王問_二仙言_一、歡喜踊躍。即隨_二仙人_一、供_二給所須_一、採_二菓_一、汲_二水_一、拾_二薪_一、設_二食_一、乃至、以_レ身而為_二床座_一、身心無_レ倦。于時奉事經_二於千歲_一、為_二於法故_一、精勤給侍令_レ無_レ所乏。⁽¹⁹⁾（中略）即便隨_二仙人_一、供_二給_二於所須_一、採_二薪及菓_一、隨_二時恭敬_一、情存_二妙法_一故、身心無_レ懈倦。

ここでの王は、釈尊の前世の姿である。そして、その王は法（法華経）を求めるために王位を捨て、仙人に仕え、菓を採り、水を汲み、

薪を拾って、食を設け、身をもつて座とし、身心は疲れることはなかったと説かれている。⁽²¹⁾すなわち、釈尊の過去世の修行の様子とその修行により法を得て成仏できたことを説く。そもそも提婆達多品とは、提婆達多の成仏と龍女の成仏の話からなる。右の引用文について、藤井教公は「往昔の師弟の持経の相を明かす」部分であると指摘する。⁽²²⁾この引用文は過去世の釈尊と阿私仙という仙人の師弟の関係を述べるが、この話の続きでは現世の話として、じつは王は釈尊であり、仙人とは提婆達多であることが明かされる。つまり、提婆達多という善知識、すなわち仏道を教え導いてくれた良き人のおかげで釈尊は成仏することができ、また、釈尊は提婆達多が未来に成仏することを予言する。

この『法華経』における釈尊の薪水を含む修行譚は、『正法眼蔵』「授記」では、次のように解釈される。「古仏いはく、相繼得成仏、転次而授記（中略）いま諸仏諸祖の現成するは、施為に転次せらるるなり。五仏六祖の西来する施為に転次せらるるなり。いはんや運水般柴は、転次しきたるなり。即心是仏の現生する転次なり」。まず、この文言の冒頭部分において、道元は「古仏いはく、相繼得成仏、転次而授記」という句を含む一文を掲げる。この「古仏いはく」は釈尊の発言を指している。また、それに続く「相繼得成仏、転次而授記」の句は『法華経』序品に確認でき、さらに右に引用した「いま諸仏諸祖の現成するは」から始まる一文を挙げる。諸仏諸祖が現れるのは、施為すなわち動作をする時に転次する。ちなみに、転次

とは一瞬一瞬に次から次へと仏の証言および予告が引き継がれることをいう。ここでは、ましてや施為という水や柴を運ぶ修行においてこそ、転次するのであり、かつ「即心是仏」というようにその心がそのまま仏として現れ引き継がれると主張する。

『法華経』提婆達多品と『正法眼蔵』「授記」における薪水の修行譚の意義として、次の二点が挙げられよう。前者は王すなわち釈尊と仙人すなわち提婆達多の師弟関係とその成仏であり、後者は諸仏諸祖が現れ修行する時に仏の証言が転次して引き継がれ、成仏するということである。このことから、Fの「水を運び、薪をとり」の一文における茶の湯の具体的な修行方法とあり方は、『法華経』提婆達多品と『正法眼蔵』「授記」に見える釈尊の薪水を含む修行譚になぞらえていると指摘できる。またこのFは、利休と弟子の南坊宗啓の茶の湯についての談義の中で、利休が一碗の茶を点てる方法と意義とそのあり方を具体的に南坊宗啓に教示する場面とされている。

Fでは、撰述者実山が、『法華経』提婆達多品における薪水を含む修行譚の仙人と釈尊の師弟関係を利休と南坊宗啓になぞらえて創作していると推測できよう。さらに、『正法眼蔵』「授記」の運水般柴の修行が諸仏諸祖の転次という引き継ぎを示す解釈は、Fに続くGの「ミなく仏祖の行ひのあとを学ぶ也」という文によって言い換えられているとも言えるだろう。

ところで田中仙樵は、『覚書』冒頭部を解説するにあたり、「釈迦

が仙人に就て水を汲み薪を樵りて難行せられた」という一例を示し、その典拠を『遺教経』の少欲知足の教えにあるとした。⁽²³⁾ 少欲知足とは欲が少なくわずかなもので満足することを意味するが、「覚書」冒頭部Dに「家ハもらぬほど、食事ハ飢ぬほどにてたる事也」と言うものの、少欲知足に関する文言は見られない。たしかに、『遺教経』は、経名にあるように釈尊の遺した教訓を記した経で、『正法眼蔵』「八大人覺」で引用され、禪宗で重要視されている經典である。また、「八大人覺」とは、大人である諸仏が、少欲・知足・寂靜・精進・不妄念・禪定・修智慧・不戲論の八種の法門を覺知することだが、「覚書」冒頭文の背景には「八大人覺」の引用は見られない。このことから、ここに典拠として『遺教経』を挙げることは適当ではないだろう。

Gの「ミなく、仏祖の行ひのあとを学ぶ也」という文は、この「覚書」冒頭部の思想的背景のまとめとして述べられている。これまで見てきたように、「水を運び、薪をとり」という表現は、『法華経』提婆達多品や『正法眼蔵』「授記」に典拠があり、それは仏すなわち釈尊の修行譚を指していると解釈できる。ゆえに、ここで「仏祖」が釈尊を指していることは明らかであろう。⁽²⁴⁾

三 『草庵自誠並示僕童』「其の七」訳註

前節までに、『南方録』「覚書」冒頭部における訳註とその解釈を

行った。『南方録』冒頭部の背景には、『正法眼蔵』を中心にその出典である『法華経』他の經典類が関わっていることを指摘した。ところで、実山の『草庵自誠並示僕童』「其の七」には、「覚書」冒頭部に対応する記述がある。この書は実山の『南方録』以外の茶の湯に関する著作の一つだが、成立年は未詳である。内容は「其の一」から「其の九」までのそれぞれ比較的短い話から成り、「草庵」に関して仏教語彙を多く用いて解説している点で実山の著作の中でも特異である。

「其の七」はFと内容が近いので、『草庵自誠並示僕童』は、『南方録』の「草庵」の意義をより仏教的に解釈しているものと考えられる。このことから、以下に『草庵自誠並示僕童』「其の七」を提示し、本文・現代語訳・註釈を試み、「覚書」冒頭部と比較して、次節でその解釈を行いたい。

【本文】

H 茶飯薪水の修行、法の為に此身を投じ、此身を致し、庵主も手づからみずからして、其の勞を勞とせし、かの清淨の水火を以て我・人・衆・寿の相にあらずして、普く布施せば三世の諸仏・歴代の祖師、今日の賓・主・汝等一碗裏に浴すべし。
J 諸尊・諸仏及宗易・宗啓等の回向誦經、供養茶湯、おのおの草庵の清規を守るべし。恭敬せよ、供養回向の旨趣。

【現代語訳】

茶を飲み飯を食べ薪を取り水を汲む修行は、仏法のためにこの身を投じ、この身を尽くし、亭主も手で自ら行い、その労を勞として施し、かの清浄の水と火をもって我相・人相・衆生相・寿者相をもつものではなくして、すべてに布施すれば過去・現在・未来の諸仏や歴代の祖師、今日の客と亭主とあなたたちが一碗の中に恩恵を受けるでしょう。諸尊や諸仏および宗易や宗啓らへの回向と誦經、供養の茶の湯は、それぞれが草庵の清規を守るべきです。恭敬しなさい、供養と回向をすることの意味を。

【註釈】

○茶飯 茶を飲み飯を食べること。「師問投子曰、仏祖意句、如

家常茶飯、離此之餘、還別有為人言句也無」(『聯灯会要』

二十八・淨因道楷章)。「おほよそ仏祖の屋裏には、茶飯これ家常なり。この茶飯の儀、ひさしくつたはれて、而今の現成なり。

このゆえに仏祖茶飯の活計きたれるなり」(『正法眼蔵』「家常」。

○薪水 薪をとり水を運ぶこと。「覺書」「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、」の項参照。

○修行 仏の教えを守って実践すること。「覺書」「修行得道」の項参照。

○法のために此身を投じ、此身を致し 仏法のためにこの身を投

じ、この身を尽くす。「亦能捨身無所吝、隨所樂求、尽施与、応時惠施無嫌恨、一切所有能悉捨、諸来求者皆満足、為法捨身、無央数、修諸苦行求菩提」(『華嚴經』(六十華嚴)「大正九・五二〇上」)。「為求法故、投身、滿三千大千世界、熾然火中、及地獄中久受苦惱」(菩提流支訳『十地經論』卷五「大正二六・一五五下」)。「行仏の去就、これ果然として仏を行ぜしむるに、仏すなわち行ぜしむ。ここに為法捨身あり、為身捨法あり。不惜身命なり。但惜身命なり。法のために法をすつるのみにあらず」(『正法眼蔵』「行仏威儀」)。「覺書」「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、」の項参照。

○庵主 草庵の主。亭主。「師嘗訪一庵主、款話。庵主曰、近有

一僧問某甲西来意」(道原『景德伝灯録』卷十八「大正五一・三五〇上」)。「あるとき僧きたりて庵主にとふ。いかにあら

んかこれ祖師西来意。庵主いはく、谿深杓柄長といふ」(『正法眼蔵』「道得」)。

○手づから 自身の手で。「我若生地獄・餓鬼・畜生・修羅等之趣、又生自餘之八難處、雖有求僧力之覆身、手自不可作供養三宝之淨食」(『永平清規』「典座教訓」)。

○みづからして 自ら行う。「雪峰の真覺大師の会に一僧ありて、山のほとりにゆきて、草をむすびて庵を卓す。としつよりぬれども、かみをそらざりけり。庵裏の活計たれかしらん。山中の消息悄然なり。みづから、一柄の木杓をつくりて、谿のほとりに

ゆきて、水をくみてのむ」(『正法眼蔵』「道得」)。

○其の勞を勞とせし その勞力を勞力として施す。「至於作務、猶与衆均其勞。常曰、一日不_レ作一日不_レ食」(德輝『勅修百丈清規』卷二「住持章第五」[大正四八・一一一九中])。

○清淨の水_二火_一 清く淨らかな水と火。「一切智智清淨故、水_二火_一風空識界清淨、水_二火_一風空識界清淨故、不思議界清淨」(『大般若波羅蜜多經』卷二百六十三[大正六・三三九上])。「この水_二火_一を受用するたぐひ、みな本証の仏化を周旋するゆえに、これらのたぐひと共住して同語するもの、またことごとくあひたがひに無窮の仏徳そなはり」(『正法眼蔵』「弁道話」)。

○我・人・衆・壽の相 我相・人相・衆生相・壽者相のこと。我相とは我執、人相とは我は五蘊のどれかにありそれに対する執着、衆生相とは我は五蘊の和合から生じると捉えることに對する執着、壽者相とは我にはそれが存続する期間があるという執着をさす。ここでは、菩薩は我相・人相・衆生相・壽者相をもつてはならないことから、これらの四相に執着してはならないことをいう。「須菩提、若菩薩有_二我相・人相・衆生相・壽者相_一、即非_二菩薩_一」(鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』[大正八・七四九上])。

○普く布施せば すべてに布施すれば。「是故聊引_二大士因緣_一。普布_二施_一、会中比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等、同結_二当_一来世仏果因_二」(春屋妙葩『知覺普明国師語錄』卷二[大正八〇・六五

八下])。

○三世の諸仏・歴代の祖師 過去・現在・未來の諸仏や歴代の祖師。「如_二三世諸仏_一、說法之儀式、我今亦如是、說_二無分別法_一」(『法華經』卷一・方便品[大正九・一〇上])。「三世諸仏、皆曰_二出家成道_一。歷代祖師、伝_二仏心印_一、尽是沙門」(德輝『勅修百丈清規』卷五「登壇受戒」[大正四八・一一三八下])、『正法眼蔵』「受戒」に同文あり。

○今日 今この時。「得法せらんは、すなはち一箇の真箇なる古仏にてあれば、むかしのたれにて相見すべからず。かれわれをみるに、新条の特地に相接す。われかれをみるに、今日須入今日の相待なるべし」(『正法眼蔵』「礼拝得髓」)。

○實・主 賓客と亭主。ここで「主」とは、茶の湯の点前を通して客をもてなす亭主のこと。「天福中、遊方抵_二天台山雲居道場_一、参_二国師_一。實・主縁契頓発_二玄秘_一。一日因入_二普賢殿中_一宴坐」(道原『景德伝灯録』卷二十六[大正五一・四二一中])。「堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがひに道業を一興すべし。いまは、しばらく賓・主なりとも、のちにはながく仏祖なるべし」(『正法眼蔵』「重雲堂式」)。

○汝等 あなたたち。「仏告_二諸童_一、汝等今当_二尽受_一三帰。一心修_二善_一。以_二此縁_一故、於_二賢劫中_一、値_二最後仏_一」(『正法眼蔵』「帰依三宝」)。

○一碗裏 一碗の中。「池州嵇山章禪師、曾在_二投子_一作_二柴頭_一。投

子、喫茶次、謂師曰、森羅万象總在遮、椀茶裏、(道原『景德伝灯録』卷二十「大正五一・三六三中」)。

○浴す 恩恵を被る。受ける。「我等皆右幕下の重恩に浴し、ながらいかでか御遺跡を惜み奉らざるべき」(『梅松論』上)。

○諸尊・諸仏 多く尊者・多くの仏。「十方三世一切諸仏、諸尊菩薩・摩訶薩、摩訶般若波羅蜜、ときに鼓響すれば、大衆すなはち雲堂の点湯の座に赴す。点湯は庫司の所弁なり。大衆赴堂し、次第巡堂し、被位につきて正面面に坐す。知事一人行法事す。いはゆる焼香等をつとむるなり」(『正法眼蔵』「安吾」)。

○宗易 千利休のこと。「覚書」「宗易」の項参照。

○宗啓 南坊宗啓のこと。「覚書」「己僧の明め」の項参照。

○回向誦経 回向し誦経する。回向は自身が行った功德や善根を、衆生の悟りのために差し向けてめぐらせること。「手巾携左手、揖左右二出、看設浴施主名字、随意課誦経、呪回向」(徳輝『勅修百丈清規』卷六「日用軌範」「大正四八・一一四六上」)。

○供養茶湯 供養のための茶の湯。「随大衆入堂。後門排立、逢主人巡堂。從後門出到堂前。逢首座礼賀。粥罷僧堂前南間、向僧堂高掛戒牒牌、莊卓香・華、茶湯供養」(瑩山紹瑾『瑩山清規』卷下「大正八二・四四三上」)。

○草庵 茶室。「覚書」「草の小座敷」参照。

○清規を守る 清規を守る。清規とは禪宗での規律。「您衆和尚毎体著皇帝聖心、興隆三宝、好生遵守清規、修行弁道、専与

上位、祈福祝寿報答聖恩、弘揚仏法者」(徳輝『勅修百丈清規』卷一「大正四八・一一一〇下」)。

○恭敬せよ うやうやしく敬いなさい。「道元信感おところなし。嗣書を請すべしといへども、ただ焼香礼拝して、恭敬供養するのみなり」(『正法眼蔵』「嗣書」)。

○回向の旨趣 回向の意味。「施主回向の旨趣を紙片にかきて、聖僧のみぎのはしらに貼せり。雲堂裏看経のとき、揚声してよまず。低声によむ。あるひは経卷をひらきて、文字をみるのみなり。句説におよばす。看経するのみなり」(『正法眼蔵』「看経」)。「一、早朝日中、及与晚間。三次誦経、切須顧念回向旨趣」(『卍山道白』「東林語録」卷下「東林寺日常規約」「大正八二・五八五上」)。「回向誦経」の項参照。

四 『草庵自誠並示僕童』「其の七」の解釈

「覚書」冒頭部の話と比較すると、『草庵自誠並示僕童』「其の七」は、「覚書」冒頭部のFをより仏教的に解釈し言い換えている。ここでFを今一度提示する。

イ水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、口仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ。ハ花をたて香をたく。

Fをイ・口・ハに分けてみると、「其の七」の話のそれぞれが、イ・口・ハに対応していることが確認できる。すなわち、H「茶飯薪水

の修行、法のために此身を投じ、此身を致し、庵主も手づからみずからして」は、イ「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、」
I「三世の諸仏・歴代の祖師、今日の賓・主・汝等一碗裏に浴すべし」は、ロ「仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ」、J「諸尊・諸仏及宗易・宗啓等の回向誦經、供養茶湯」は、ハ「花をたて香をたく」に言い換えられ、説明されている。

とりわけ、Hの「茶飯薪水の修行」の文言は、イの内容に対応する。また、Hで「茶飯薪水の修行」が「法のために此身を投じ、此身を致し」と定義されている。これは、イの典拠である『法華經』提婆達多品の主旨と共通する。それは釈尊が前世に、法を求めるために王位を捨て、薪水を含む修行により法を得て成仏できたという修行譚である。

さらに、Hの「茶飯」という語に注目したい。なぜならば、「覺書」冒頭の話には見られない言葉だからである。この「茶飯」の語は語註に示した通り、『正法眼蔵』「家常」に見える。「覺書」冒頭部の主な典拠は『正法眼蔵』に拠ることから、「其の七」でも実山は『正法眼蔵』を参照していると考えられる。註で示した「おほよそ仏祖の屋裏には、茶飯これ家常なり。この茶飯の儀、ひさしくつたはれて、而今の現成なり。このゆえに仏祖茶飯の活計きたれるなり《総じて仏祖の家では、茶飯は家常すなわち日常の行いである。この茶飯の儀が、長い間伝えられて、今に現われている。そうであるから仏祖は茶飯の活計をしてきた》」は、「家常」の冒頭に見え、「茶飯」

について定義している。すなわち、Hの「茶飯」は「薪水の修行」にかかる語であり、「水を運び、薪をとり」という仏法の修行を意味するものと確認できる。

Iはロに対応し、『景德伝灯録』を引用していると考えられる。というのは、Iの「一碗裏」という文言には「茶」という文字が見えないものの、『景德伝灯録』には「一碗茶裏」とあるからである。また、ロは「覺書」冒頭イの「茶をたて、」に続く文脈であり、そのたてた茶を「仏」や「人」に差し上げ、「吾」も飲むとあることから、Iの「一碗裏」には「茶」が含まれていると考える。さらに、『南方録』「滅後」冒頭部には、「一字ノ草庵ニ疊敷ニワビスマシテ、薪水ノタメニ修行シ、一碗ノ茶ニ真味アルコトヲ、ヤウヤウホノカニヲボヘ候ヘドモ、時々水ノ濁ヲナスコトハ、易ガアヤマル所也⁽²⁵⁾」とある。ここには「一碗ノ茶ニ真味アルコトヲ」とあり、「茶」の文字が見えることから、実山が『景德伝灯録』の中に見られる「一碗茶裏」を典拠としていることが推測できる。

Jの「諸尊・諸仏及宗易・宗啓等の回向誦經、供養茶湯」は、ハの「花をたて香をたく」という表現に対応すると考えた。ここでは、「花をたて香をたく」という文言が、「回向誦經、供養茶湯」の表現に言い換えられていると推測した。また、「覺書」冒頭部ハの「花をたて香をたく」は、その前文であるロの「仏にそなへ、人にもほどこし」の「仏」と「人」に対しての文言であることは明らかである。このことから、ロの「仏」と「人」がJの「諸尊・諸仏及宗

易・宗啓」を指していると解釈することも可能だろう。

このように、『草庵自誠並示僕童』『其の七』の話は、「覚書」冒頭部のFと対応し、その典拠は『正法眼蔵』を中心にしながらも、それを遡る禅宗の典籍『景德伝灯録』等を用いていることが確認できた。実山が『草庵自誠並示僕童』の中で「其の七」を項目の一つとして取り立てて解説していることは、「覚書」冒頭部Fの「薪水の修行」の解釈を重要視していることを示しているよう。

結 語

以上、『南方録』『覚書』冒頭部にはどのような思想的背景があるのかを検討した。その方法として、第一に、「覚書」冒頭部の訳註を試み、その典拠を探ると同時にどのような解釈が可能かを考察した。第二に、実山の『南方録』の抄録である『草庵自誠並示僕童』『其の七』には、「覚書」冒頭部と近い内容が見られることから、これについても訳註を付し、「覚書」冒頭部のFと比較して考察を行った。

これらの検討から、「覚書」冒頭部には、直接的には明示されていないものの、『正法眼蔵』と、さらには、『正法眼蔵』で用いられている『法華経』などの經典類を典拠としていたことが明らかとなった。とりわけ、「覚書」冒頭部Fの「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、仏にそなへ、人にもほどこし、吾ものむ、

花をたて香をたく」の一文は、『法華経』提婆達多品における仙人すなわち提婆達多を師とする釈尊の過去世の薪水を含む修行譚を典拠としている。『正法眼蔵』『授記』では、その釈尊の前世における行いは「運水般柴」と言い換えられ、諸仏諸祖が現れ次から次へと転次することとして捉えられていた。つまり、『南方録』『覚書』冒頭部で、「水を運び、薪をとり」などの行いが「仏祖の行ひ」であるとするのは、『正法眼蔵』の「運水般柴」の解釈を草庵茶の湯のあり方として置き換えているのである。

また、『草庵自誠並示僕童』『其の七』の話にも、Fに近い記述があることを指摘した。すなわち、「其の七」の冒頭H「茶飯薪水の修行、法の為に此身を投じ、此身を致し、庵主も手づからみずからして」は、Fの「水を運び、薪をとり、湯をわかし、茶をたて、」と対応する。Hに見える「茶飯薪水の修行」が「法の為に此身を投じ、此身を致し」という表現は、『法華経』提婆達多品における釈尊が過去世に、法華経を求めるために王位を捨て、薪水を含む修行により法を得て成仏できたという修行譚と近似する。さらに、「茶飯薪水の修行」の「薪水」にかかる「茶飯」という語は、『正法眼蔵』『家常』で説かれる、茶を飲み飯を食べるという日常の行いを意味し、「薪水」と同じく茶の湯の修行として捉えられていることを指摘した。『草庵自誠並示僕童』『其の七』の話は、『南方録』『覚書』冒頭部のFの言い換えであり、『法華経』提婆達多品と『正法眼蔵』『家常』が典拠にある。

これらのことから、『南方録』『覚書』冒頭部に見られる草庵茶の湯の思想は、『法華経』提婆達多品や『正法眼蔵』『授記』および「家常」などの仏教思想が背景にあると考えられる。とりわけ、『覚書』冒頭部Fの薪水の修行譚については、仏祖である釈尊が前世において行った「水を運び、薪をとり」などの日常的な行いが仏道修行であり、それが草庵茶の湯のあり方として捉えられているといえよう。

〔附記〕 小稿は、二〇二〇～二〇二二年度日本学術振興会科学研究費補助金、特別研究員奨励費「江戸中期における茶の湯と禅思想——『南方録』と『径山寺台子伝來說』を起点に——」（課題番号：2014125）における成果の一部である。

〔使用テキスト〕 主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点・読み等を私に改めた。
『永平清規』『正法眼蔵』 道元禅師全集。『太平記』『老のすさみ』 新編日本古典文学全集。『梅松論』 新撰日本古典文庫。『天王寺屋会記』 茶道古典全集。『伊曾保物語』 日本古典文学大系。『山上宗二記』 岩波文庫。『堺鑑』 浪速叢書刊行会。『南方録』 日本思想大系。『草庵自誠並示僕童』 禅茶録。

注

- (1) 『南方録』の研究史などについては、拙稿『南方録』における「草庵」の思想（『東洋の思想と宗教』第三十七号、二〇二〇・三）を参照されたい。
- (2) 『南方録を読む』（淡交社、一九八三・一二）一〇～一二頁。なお、「茶禅一味」の先行研究に関しては、前掲注（一）の注（一）、および田中仙堂「茶禅一味」（『美術フォーラム21』【特集】禅とZen）第38号、二〇一八・一（一）を参照されたい。

- (3) 熊倉功夫『現代語訳 南方録』（中央公論社、二〇〇九・七）一八頁。
- (4) 田中仙樵「喫茶南坊録講義」（『茶道之研究』六月号、一九五七・六）『三徳庵田中仙樵全集』第四卷、茶道之研究社、一九七七・一〇）三二～三五頁。
- (5) 前掲注（一）五四～五九頁。
- (6) 前掲注（三）熊倉功夫一五頁。
- (7) 『正法眼蔵』は『法華経』を参照し、各所で多く引用している。木村清孝によれば、『法華経』からの引用は、すべて「古仏」あるいは「釈迦牟尼仏」の言として出され、経名には言及されない。このことも、道元が『法華経』の釈尊を禅宗の仏祖の系譜につらなる存在として見なしていることを証している」と指摘している。木村清孝『『正法眼蔵』全巻解説』（佼成出版社、二〇一五・一〇）一三八～一三九頁。
- (8) 神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』（角川選書378 角川学芸出版、二〇〇五・七）一九～二〇頁。以下の研究がこの指摘に賛同している。前掲注（三）八八六～八八八頁。八尾嘉男『千利休』（茶道教養講座⑤ 淡交社、二〇一六・一二）二二〇頁。中村修也『千利休 切腹と晩年の真実』（朝日新書707 朝日新聞出版、二〇一九・一二）二五頁。
- (9) 前掲注（八）神津朝夫参照。
- (10) 前掲注（三）八八八頁。
- (11) 前掲注（一）四一～五九頁。
- (12) 石井修道によれば、『正法眼蔵』「袈裟功德」の表現である「世尊告智光比丘言、法衣得十勝利」は、『大乘本生心地観経』卷五「無垢性品第四」に典拠があると註している。石井修道訳註『正法眼蔵8』（原文対照現代語訳 道元禅師全集⑧、春秋社、二〇一一・一〇）二七五頁。なお、『大乘本生心地観経』とは父母・衆生・国王・三宝の四恩説から大乘的出家主義を説く經典である。出家して森林に住み、心地を観想し妄想を断じて、仏道を得ることを述べる。頼富本宏『中国密教の研究 般若と贊寧の密教理解を中心として』（大東出版社、一九七九・一二）など参照。

(13) 『堺鑑』では堺出身の「堺舜慶」という人物が、茶人を焼き、その祖であると述べている。しかし、寛文十一年に小堀遠州門下によって編集された『茶器弁玉集』には、「境春慶ト云事、和泉ノ境ニテ焼ト云説非也。実ハ美濃尾張両国ノ境目ニ窯ヲ立、焼出ス故ニ云コト明也」とあり、境春慶は瀬戸茶入窯の区分名のことをいう。なお、春慶とは尾張瀬戸の陶祖加藤四郎の法号である。また、『原色茶道大辞典』「境春慶」の項には、「一説に泉州堺で焼いたというのは誤り」とある。

(14) 櫻本香織「径山寺台子伝来説の背景―茶の湯の「起源」をめぐる―」(『多元文化』第八号、二〇一九・二)で、台子の意義を論じ、『南方録』における「台子」の位置づけにも言及した。

(15) 石井修道は、『正法眼蔵』「受戒」の「饒益衆生戒」の語は、『菩薩善戒經』卷四「戒品」にあると指摘している。前掲注(12)二四八頁。

(16) 大野法道「菩薩善戒經について」(『大正大学学報』二九輯 大正大学出版部、一九三九・五↓『大正大学学報』第八卷 第一書房、一九八〇・一二)。

(17) 田村芳朗・藤井教公『法華經』上(仏典講座7 大蔵出版、一九八八・三)五九頁。

(18) 前掲注(1)四七頁。

(19) 西山松之助校注『南方録』(『近世芸道論』日本思想大系61 岩波書店、一九七二・一)一〇頁、前掲注(3)一五頁。

(20) 実山の『南方録』以外の著作の中で述べられているように、『南方録』の仏教語彙の一つである「露地」は、鳩摩羅什訳の『法華經』譬喩品を典拠としている。たとえば、『壺中炬談』「露地大概」、『喫茶又録』第一「露地篇・大概」、『草菴大綱』「露地大概」には、「露地は草庵寂寞の一境をすべ(都)たる名(号)也。法華譬喩品に長者(の)諸子(すでに・の)三界の火宅を出て露地に坐すると見えたり」とある。また、この出典については、以下の先行研究の中で踏襲されてきた。柴山不言『喫茶南坊録註解』上巻(初出一九二八・六↓茶と美舎、一九七二・一二)二二八頁。前掲注

(4) 四一〜四二頁、古田紹欽『草庵茶室の美学 茶と禪のつながり』(雪華社、一九六三・三↓淡交社、一九九〇・八)三七頁。前掲注(19)五三四頁。久松真一「茶道の哲学」(久松真一著作集第四卷 理想社、一九七三・七↓講談社学術文庫813 講談社、一九八七・一二)七〇頁。

(21) 『法華經』提婆達多品における釈尊の薪水の修行譚は、これまで日本の説話集などにおいて引用され、話が作られてきた。藤井教公は、「行基菩薩作と伝える、「法華經」を わがえしことは新こり菜つみ水くみつかへてぞえし」という有名な歌がある」と指摘している。(『法華經』下 仏典講座7 大蔵出版、一九九二・一〇)六二五頁。また、岡田美也子は、「宇治拾遺物語」の樵翁における「薪をとりて、世をすぐる程に」の表現について、『法華經』提婆達多品の逸話が典拠であると述べている。岡田はこの『法華經』提婆達多品から影響を受けている説話として、藤井が指摘する「拾遺集」や、『梁塵秘抄』「長秋詠藻」などを紹介する。(『宇治拾遺物語』樵夫説話と慈円―第三話を起点として―『千葉敬愛短期大学紀要』二三号、二〇〇一・一二)。

(22) 前掲注(21)藤井教公六二四〜六二五頁。

(23) 前掲注(4)三三頁。

(24) 熊倉功夫は仏祖を「釈迦や祖師」として現代語訳している。前掲注(2)九頁。前掲注(3)一五頁。

(25) 前掲注(1)四六〜四七頁。